

# 仙台教区報

カトリック仙台司教区本部事務局  
〒980  
仙台市青葉区本町1丁目2番12号  
☎ 022(222)7371  
FAX 022(222)7378  
編集・発行 板垣 勤

長崎で第2回福音宣教推進全国会議 開催

## 神のみ旨に基づき家庭を育てるために

89年から準備が始められた第2回福音宣教推進全国会議(ナイス2)がいよいよ10月21日から24日まで長崎で開かれる。全国会議を前に、ナイス2事務局では各教区に全国会議を進める基本的な資料となる教区最終報告の提出を求め、教区では要請に応じて報告書を届けた。

全国会議には佐藤司教と教区の代表者が出席するが、あらためてナイス2のテーマを見ると「家庭の現実から福音宣教のあり方を探る―神のみ旨に基づく家庭を育てるために―」とある。これはナイス1の精神を受け継いだ教会が、社会、家庭で実際に取り組むべき課題を持っていることを表わしている。

ナイス2はしばしば言われてきたように小教区で「分かち合い」を積み重ねることに大きな意味がある。仙台教区では分かち合いをどう進めるのか、テーマはどのような

に取り扱うか、などの問題が小教区にとまどいを与えたりしたが、分かち合いが少いづつ理解され行なわれていることは一つの進展である。

しかし、ナイス2のテーマが「どうもはつきりしない」という声も相変わらずいろいろなところから聞こえている。なぜそうなるかを考えると、信徒にとって「家庭」というテーマが個人的なこと、あるいは内向きな活動と理解されやすいことにあるようだ。従って、ナイス1が打ち出した「開かれた教会」と今回のテーマがどのように関連するのか分かり難いという印象を与えることになった。

9月に開かれた宮城県カトリック大会で講師を務めた岡田司教は「真の開発とは何か」という回廊から構造悪という言葉を取り上げて、信徒が考えてほしいことを指摘してくれた。それは①みことばと典礼を通

してイエスの生涯を思い浮かべ②人間としてかかえている重荷を担いあって③構造的悪と闘うこと、の3点である。

岡田司教は指摘したことを具体化するため、信徒が滞日外国人と関わりを持つように勧め、その際、イエスが十字架上で私たち人類の罪を重荷として担ってくださったことを忘れないようにと強調した。

### ナイス2は外に向いている

イエスがこの世で、何を見て、何をしてくれたかを知ることには大事である。よく大人どうしの会話で子供のいじめの問題がでると、大人たちは子供の世界がおかしいと言う。それは本当だろうか。実は、子供のいじめや非行の問題は子供のことを言う前に、大人の生き方を問うことだと気付かされる。

子供は社会の中で大人たちの行動を見、しかも手本として成長していくことを大人が認めるなら私たちの生き方、そして社会は変わっていくだろう。私たちはナイス2を契機に日本社会の価値観が全体的にゆがみ、家庭も個人もおかしくなっていることを認め、見直さなければならぬ。この見直しは日本にとどまるものでなく、アジア諸国をはじめ全世界に及ぶものである。

ナイス2は信徒が親として子として、社会や家庭でこれからのような価値観を持って生きていくのかを問いかけている。



司牧評議會定例会議 報告

司牧評議會定例会議が9月23日に司教区センターで開かれた。会議は評議員が改選されて初めて出席したことから顔合わせと今後評議会で取り上げる課題を知り、それについて話し合うのが主な目的であった。

佐藤司教は教区のみんなが意見を出し合うことで、教区に新しい展望が開かれることになること、そのために新評議員に期待すると挨拶の中で話した。

会議の議題は①教区センターの活用について②司祭召命活動について③役員選出④報告、その他であった。

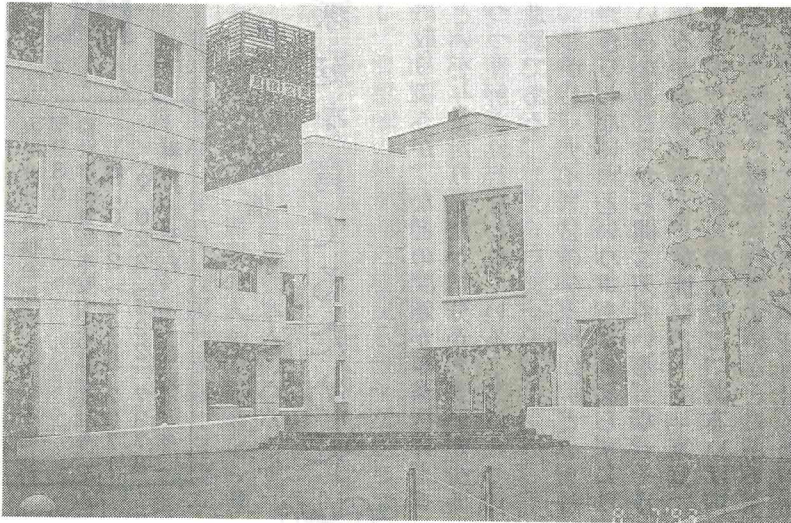
カトリック仙台司教区センター

献堂式



すでに「教区センター建設ニュース」21号(8月15日発行)でお知らせしたように昨年6月28日に着工して、工事が進められていたカトリック仙台司教区センターの献堂式が7月24日に行なわれた。

献堂式は教皇庁大使カルー大司教を迎え教区内外から多数が出席して献堂を感謝するミサが捧げられた。説教は前仙台教区長の小林有方司教が車イスから行ない、新しい建物の完成を喜ぶとともに、みんな福音宣教のためにいっそう心と力を合わせて



働きましょうと、信徒を励ました。佐藤教区長も施主の挨拶の中で、「開かれた教会」を目に見える建物としても表わすことを目指し、それが視覚的にすばらしいものとして完成したことを喜び、さらに司教区センター建設を契機に仙台教区民が日本の社会に遣わされた本来の使命である福音宣教に邁進するよう呼びかけた。

お知らせ

佐藤司教は11月1日に椎間板ヘルニアの手術をする予定。入院加療は一か月以上になることが見込まれている。

情報

初誓願式

オタワ愛徳修道女会では9月23日に、笹氣直哉神父の司式で安藤めぐみ(元寺小路教会出身)さん、中西佳美(東京出身)さんの初誓願式を行なった。

金祝ミサ

教区主催の金祝ミサが10月11日に四ツ家教会で行なわれた。司祭叙階50周年を祝ったのはG・シュトルム神父(二戸教会ベトレム宣教教会)。

温かい家庭づくりを願って 月刊誌 家庭の友

一部(千別) 260円  
年間予約(千税共) 3100円

掲載内容の一部

- ◎信仰共同体としての家庭
- ◎家庭における老人介護のありかた
- ◎モンテッソーリ教育・青少年教育問題、等々

申し込み先 千160 東京都新宿区若葉1丁目5番地  
中央出版社 ☎03-3359-0451 〆03-3351-9534

### カトリック大会 開かれる

今年も教区内で信徒の集いが開かれている。各大会は長崎で開かれる第2回福音宣教推進全国会議を前に、昨年同様「家庭」をメインテーマに取り上げた。岩手県は4つの地域で集まりを開催中なので、以下に3県の大会報告をする。

◎青森県では8月29日に八戸聖ウルスラ学院で三百八十名が参加して、青森県カトリック八戸大会が行なわれた。「家庭での信仰生活の実践」のサブテーマを掲げた大会は、ナイス2の課題「家庭の現実から福音宣教のあり方を探る」を受け取って開かれた。

大会では体験発表が3件あった。青森県立病院総婦長の小笠原桃子さんは「看護婦の目を通して」と題して看護学生を指導している様子や、精神科の看護婦として不登校、拒食症の子供たちなど多くの患者に見る悲しい現実について、また自らが体験した結婚生活と信仰生活を両立させることの難しさについて話してくれた。

弘前教会の佐々木健五郎さんは「よろこび」と題して入院の体験を通して多くの人と関わり、命の大切さを知ったことをユーモアを交えて話した。

八戸塩町教会の蒔苗実さんは「信仰雑感」と題して自分の信仰歴を英語を交えてユーモラスに話し、会場を湧かせた。25のグループになった分がち合いは、日常生活で親として子供の宗教教育で悩んでいること、日頃信仰の悩みなど他の人に聞きたいと思っていたことなどを話し合った。終わりに全員でシャロームを歌って喜びのうちに大会は終わった。



◎宮城県では9月5日に司教区センターで「家庭を通しての福音宣教」と題したカトリック大会を開いた。新しい建物に四百名を超える人が集まった大会は浦和教区の岡田司教の基調講演(一面参照)とシンポジウムが中心であった。

パネラー4名によるシンポジウムは多くの話題を提供し、中でも、シスター鷹衛の「異なった一つ一つの家庭が、まず神の救いの業を受けとめるといふ福音宣教がされなければならないと思う」という話や、塩釜教会の佐々木正吾さんの「良き魂の主治医を得るために、神父、シスターを自宅に招こう」との呼びかけは注目された。

◎福島県では9月15日に桜の聖母学院高校に二百七十名が集まり、「教会の新しい歩み」をテーマに4名の信徒が発題し、質疑応答によってテーマを深めあった。

今回の大会は事前に佐藤司教に質問事項を知らせて「司教との対話」が行なわれ、この企画は大会の目玉として熱がこもった時となった。司教への質問は多岐にわたり、司教から直接答えてもらったことは多くの参加者に喜ばれた。大会は時間をもっとほしいと言われる程に充実したものであった。

ミサ中の献金は司教区センター建設資金とアルコール問題に取り組んでいる郡山マックへの援助金として捧げられた。

### 新しい賛美の歌 仙台フェスティバル 安木内

教区では司教区センター聖堂を会場に、日本カトリック研修センターと共催で「新しい賛美の歌仙台フェスティバル」を開きます。2回目になるこのフェスティバルでは「聖堂の中や典礼の場だけでなく生活の場でも歌えて、歌うことで信じる心が新たにされ、人人の心に福音的な愛と平和への共感を呼ぶような新しい賛美の歌」が生まれることを願って全国から作品を募り、入選作に選ばれた曲を紹介します。

新しい賛美の歌は、1回目の入選作品、その他の曲とともに仙台市内の各種団体により歌われます。

日時 11月13日(土) 16時  
場所 司教区センター聖堂  
入場整理券 200円  
(聖パウロ書院で扱います)  
問い合わせは  
司教区本部事務局まで

◎司教区センターで10月8日に、宮城ソフィア会主催の文化講演会が開かれた。演題は「生と死を考える」  
A・デーケン神父(イエズス会)

### 教区典礼研修△云 好評のうちに終わる

全国各地で典礼への関心が高まっていることを反映して、仙台教区典礼研修会が10月3日に司教区センターで開かれた。この研修会は仙台市内の信徒が企画して始まった信徒主体の研修会である。

研修会は東京から教会音楽家の小田賢二先生を迎えて「典礼をより豊かなものに」というテーマで進められた。

研修会の参加者は、テーマの副題を「喜びをもって、みんなでミサを捧げることができるように」としたこともあって、青森から郡山まで全教区にわたる小教区や修道院の典礼係や典礼委員など多彩な顔触れとなった。最終的に参加者は募集人員を上回る百十八名のとなり、準備委員を慌てさせる一幕もあった。

小田先生は「ともにささげるミサ」(オリエンズ宗教研究所)を参考に、ミサについて基礎的なことを丁寧に分かり易く説明してくれた。なかでもオルガンを使って典礼音楽を実習するときは会場が熱気にあふれて、先生が驚くほどだった。

参加者からは時間が短く感じた、もっと話を聞きたいなどの声がかえ、研修会が終わった後に設けた小田先生への質問の時間にも、半分以上のひとが残ったのを見ると典礼についての関心が本当に高いのだと

感じさせられた。

会場でのアンケートを回収したところ、これからも教区内で同じような研修会を開いてほしいと多くの人から要望があり、準備委員たちはこれから取り組む課題があると思いつつも実りある研修会となったことを喜びあった。

### 統一協△云は キリスト教か



最近、仙台でも統一協会が各種の活動を活発にし始めたようであるが、この時期に仙台の聖ドミニコ学院を会場に、「若者はなぜ統一協会に走るのか」を学びあう社会問題勉強会が開かれた。この会は9月25、26日にカトリック正義と平和仙台協議会が間野秀昭神父(フランシスコ会)を招いて行なわれた。

勉強会には統一協会から自主脱会した人が参加したこともあって、初めて話しを聞いた人には衝撃的な話題もあった。

野間神父は統一協会がキリスト教とまぎらわしい名前を使っているが本質はキリストの教えをねじ曲げたものであること、統一協会は反社会的な行為をしている団体であると話した。信徒はキリストの福音とは相容れない統一教会の実体をよく見て、惑わされないように注意したい。

## 教会の事業の現場から

## 選ばれる幼稚園に

佐々木 國雄

(宮古小百合幼稚園・園長補佐)

アメリカでミリオンセラーになり、日本においても多くの読者の反響を呼んだ、ロバート・フルガムのエッセイ集「人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ」という本があります。

その中で著者は、「人間はどう生きるかどのようにふるまい、どんな気持ちで日々を送ればいいのか、本当に知っていないか、ならないことを、全部残らず幼稚園で教わった。人生の知恵は、大学院という山のてっぺんにあるのではなく幼稚園の砂場に埋まっていたのである。」と言い、そこで学んだのは「何でもみんな分けてあげること、ずるをしないこと、人をぶたないこと、使ったものは必ず元のところに戻すこと。散らかしたら自分で後片付けをすること。人ものものに手を出さないこと。誰かを傷つけたら、ごめんなさいと言うこと。食事の前には手を洗うこと。トイレに行ったらちゃんと水を流すこと。

釣り合いの取れた生活をするこゝろ毎日、少し勉強し、少し考え、少し絵を描き歌い、踊り、遊び、そして少し働くこと。

毎日、必ず昼寝をすること。おもてに出るときは車に気をつけ、手をつないで、離ればなれにならないようにすること。

不思議だなと思う気持ちを大切にすること。……種から芽が出て、根が伸びて、草花が育つ。どうしてそんなことが起きるのか本当のところは誰も知らない。でも、人間だって同じだ。

金魚も、ハムスターも、二十日鼠も、発砲スチロールのカップに蒔いた小さな種さえも、いつかは死ぬ。人間も死から逃れることはない……。」

人間として知っていないなくてはならないことはすべて、この本の中に何らかの形で触れている。ここには、人にしてほしいと思うことは自分もまた人に対してそのようにしなさいという聖書の教えや、愛する心や衛生の基本が述べられている。エコロジー政治、それに平等な社会や健全な生活についての考察もある。

この中の一つを取り出して、大人向けの言葉に置き換えて、家庭生活、それぞれの仕事、国の行政、世間一般に当てはめればきつとそのまま通用する、と著者は言い、私たちが生きて行くうえで必要なことは幼いときに学んでいるはずであるし、充分に知っていることであり、それはそんなに難しいことではないのにと語りかけている。

幼児が社会(集団生活)に適應していく

ためには、社会の持つ行動様式を身に付けていくことが要求される。このような行動様式の中に食事、排泄、睡眠、着衣、清潔についての基本的生活習慣があり、幼児が自立し、社会化していくのに必要である。日常のあいさつことば「おはよう」「さようなら」「ありがとう」「ごめんなさい」など基本的なことは、いずれも躰によって身につけていくことである。

最近の小学校現場からの実践報告に、そうしたことをきちんと身につけている児童のほうが学習への適応も早く、塾に通わせたりするより、よほど「成績」の向上に結びつくのではないかという話がある。しっかりととした生活習慣は「ものの方・感じ方・考え方・表現の仕方・行動の仕方」にも連動するのではないだろうか。個としての家庭、集としての幼稚園が連携して子育てをすることの重要性がいま問われている。

生活様式や価値観が多様化する中で、カトリック保育の持つ人間観、価値観を土台に人生に必要な知恵を学ばせることが出来たなら……と私は思っている。

小学校は義務教育である。親は学校を選ぶことが出来ない場合が多い。しかし、幼稚園は選ぶことが出来ることを、あらためて見直したい。



## 信仰に生きる

山前ミサを  
待つ人たち

各種のマスコミによると、海外から日本で働くため来る人たちは不況のために少なくなつた。それでも、日本の不況は世界的に見るとまだまだというので、働き口を求めて日本に留まる人が多くいる。その中にはカトリック信徒が多くいて、仙台教区内にも住んでいる。

彼らにはいろいろと難しい問題があり、その一つに仕事の関係でミサに与りたくても与れないことがある。たとえば、仙台地区では英語とスペイン語のミサが定期的に行なわれているが、海外からの信徒の要望に応えるまでにはなっていないという実情がある。

このレポートでは仙台郊外の温泉で月一度行なわれているミサの様子と、ミサに与る人たちについて伝える。

温泉で働いている人たちは主にフィリピン人で10代から20代の人が多い。彼らは日曜日に教会のミサに与ることが叶わないため月一度6畳の和室で行なわれるミサに、それぞれの仕事の合間をぬって出席する。ミサは小さいテーブルを祭壇にして行なわれしばしば20人以上の人が集まるために部屋の脇の板の間にまで人があふれる。

しかし、彼らにとってミサは待ちに待った大切なもの。彼らにとってミサに与り聖体をいただくことは格別の喜びだから、部屋の狭さも薄汚さも大きな問題とはならない。主イエスと親しい交わりを持てる喜びのほうが圧倒的に大きい。

そういうわけでミサ中の彼らの笑顔と真剣な眼差しは、実際に見たものの胸を打つものがある。ミサを通して垣間見る彼らの姿に、主イエスは確かに貧しい人たちと共にいる方であることを思い知らされる。

ミサ後のお茶飲みは粗末な調度品を使つて行なわれ、神父と一緒に来た人たちも集う席はイエスを中心に信仰の仲間が集まれたという喜びでいっぱいになる。それぞれが持ち寄つたお菓子を分けあって過ごす時は、彼らにとってわずかしかないくつろぎの時である。そこでは、毎回のように入らぬ神父が自分たちのためにミサをしてくれることへの感謝と喜びの言葉が聞かれる。

お茶を飲みながら彼らの仕事の様子を聞いたところ、職場での勤務は朝6時から夜12時までで、驚くことには休日も自由時間もないとのこと。踊り子たちは朝食の準備からホテルの草取りにと次々と仕事に駆り出されて本当に休む間がなく、しかも一日のショーが何回かあるので、たとえば体の具合が悪くなつても病院に行くどころか休むことも出来ないということだ。

そんな中で、彼らは温泉の客が朝から何

時間もカラオケセットに向かつて歌い続けたり、毛皮の展示会で一着七、八百万円するものを買うのを見て、「日本人どうなっているの?」と驚きの声を上げていた。

彼らは家族のため大きな犠牲を払って働いているが、月一度のミサの時も「何をしたいんだ」と仕事に就くよう呼びに来る見張り人の声を聞かなければならない。

そんな話を聞くと、現代の奴隷のように扱われる彼らが日本人の金銭欲に翻弄されているのではないかと考えさせられる。しかし、彼らはどんな扱いを受けても日本に早く溶け込もうと、トイレの壁に手書きの五十音表を貼るなどして日本語を覚える努力を続けている。

ミサと交歓のときを終わって、神父たちが帰るとき、彼らは真剣な面持ちで「次はいつ来てくれる?」と問いかけてくる。たとえ言葉が通じにくくとも、ミサと神父を待つ彼らの姿は「信仰の恵み、喜び、力」そして、人として「まごころ」を持って生きることの大切さを教えてくれる。

異国で暮らす彼らには、私たちの想像を越え言葉にならない苦しみ、悲しみ、痛みがたくさんあるだろう。だが、神を信じてすべてを分け合い、互いに支えあって生きている彼らの生きざまに、互いに愛しあうことを実践する教会の姿を見る思いがするのであった。



# 仙塩地区区日曜学子校 教師研修△云報生口

工藤 尚美

今年も6月26、27日の二日間仙台市郊外の「ドミニコの家」で仙塩地区日曜学校リーダー研修会が行なわれました。講師は昨年引き続きシスター影山です。今年はや青森、会津などから20名が参加し、いつもの年よりまたひとつ交流の輪が広がった研修会になりました。

研修会は主に講話と分かちあい、テーマは「秘跡」でした。シスターは秘跡は堅苦しいものではないということを強調し、特に子供たちには頭で教え込むのではなく実際に叙階式などに参加させ、喜びを身近かに感じさせることが大切だということなどを話してくれました。

最後に「秘跡はイエス様の愛です」と言われてにっこり微笑まれたのが印象的でした。この短い言葉の中に、秘跡を理解するうえで一番大切なことが語られているように思い、あらためてイエス様の愛の深さを感じさせられました。

分かちあいはシスターを囲んで一つの輪になり、和やかな雰囲気の中で行なわれました。子供のミサ、保護者との協力態勢、子供との接し方など、日頃、日曜学校の活動を通して感じていることを、それぞれが思い思いに意見交換しあいました。



子供との接し方については、シスターから学ぶことが多くありました。シスターは上から教え込むのではなく子供が自分で気付くことが出来るよう温かく見守り、ありのままに子供を受入れようとしています。その姿勢に私は自分のこともありのままに受入れてくれている神様に対して感謝の思いが湧き出て、考えさせられました。

二日目の朝に、分かちあいで紹介された東仙台教会作成の式次第による子供のためのミサが行なわれました。子供のミサは各教会でいろいろ工夫されているようですが

これからも情報交換をし、より良いものを作っていくけたらと思いました。

短い期間でしたが、同じ活動に携わっている仲間たちと分かちあったりする中で、多くのことに気付かされたり、励まされました。

## 私の好きな 聖書書の三言葉

「世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっています。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです。」 イコリント1・21

この言葉は自分の無力さに打ちのめされ落ち込みのどん底で神を呼んでいたとき、暗闇を照らす光となって私を包み、支えてくれた言葉です。

私の人生を振り返ると、神は宣教によって私をご自分と出会わせてくれました。さらに神は取るに足りない私を導具にしてご自分を現わす手伝いをさせていたのです。私の足りなさは神の恵みを受ける「器」となっていることを意味し、それゆえイエスを頼り力となることを信じています。

この言葉はこれからも、私の弱さ、小ささ、無力さを味わわせ、私の闇を照らす光となって導き、私を宣教の手段として使ってくれるでしょう。

(S・K)

≡ 結婚講座から生まれた本 ≡

元寺小路教会で結婚講座を担当している神田香苗(信徒男性)さんが「結婚と法律の話題」(非売品)と題する小冊子を発行した。この本は教会の内外で信徒の働きが求められている時代を反映し、神田さんの長年の経験、経歴をもとに書かれた。

内容は担当する婚姻と法律の講座をもとに次のような目次である。①新憲法と嫁姑②結婚の意志・婚約・結納③夫婦別姓④内縁・同棲・重婚⑤国際結婚⑥離婚。結婚に関わる問題が増えているこの時期に適った出版物として喜ばれている。



第6回国際カトリック看護協会  
アジア地区大会に

参加して

鈴木俊子

私は7月24日から27日までの間、日本カトリック看護協会仙台支部の一員として、名古屋での大会に参加してまいりました。仙台からは指導司祭はじめ6名が参加しました。

「看護における人間の尊厳」をテーマに今回の参加国は16ヶ国でした。外国の方が百三十名、日本からは二百六十名が参加し

会場の名古屋国際会議場では同時通訳がつき、講演、シンポジウム、ミサ等は英語と日本語で行なわれました。

初日の南山教会での歓迎ミサ、参加国紹介、ドイツの方の奇麗なハーモニイの聖歌を耳にし、「ああ！国際大会に参加しているのだ」と言う実感がわきました。

数ある講演の中でも「看護に於ける人間の尊厳―指導者の役割」と「アジア諸国における保健・医療の現状と展望―人間を見失わない医療と看護の実践」と題するシンポジウムが印象に残りました。

私は講演やシンポジウム、毎日のミサを通して、看護職に就いている喜び、毎日の仕事そのものが神の愛の実践に導かれているのだから、今後も頑張らなければならぬと思いました。

また、アジア諸国における医療についても、国によって保健・医療の実情も異なるし、看護職の置かれた状況も様々だから将来に向けて相互協力していかなければならないと思いました。

病氣というものは患者本人のみならず、その家族や職場、周囲の人々の尊厳をも考へなければならぬ。人間の尊厳と看護の関係は看護者の永遠の課題であると考えさせられました。

最後にアジア地区大会に参加できた恵みに感謝します。

会員募集中

広げよう看りの輪

日本カトリック看護教会仙台支部

(JCN A)

光ヶ丘スペルマン病院内・渡辺

022125710231

読書案内

「ナルニア国ものがたり」

C・S・ルイス作(岩波書店)



ぼく、つまり、読書案内を書いているこのぼくがまだ学生だったころ風邪を引いて学校を休んでいたときに、ベッドのなかで読んだ本です。読みはじめたらおもしろくて、もうとちゅうでやめられなくなってしまうほどおもしろかった本。三日くらいで風邪は治ったけれど、本がおもしろかったので、もう三日休み、読み終わってからはニンマリとして学校にでかけたというわくつきの本。このものがたりの全体のひみつは、さいごまで読まないかわかりませんよ。死者の復活について考えたい人も読んでみてください。このものがたりにあるような感覚をもつことはとてもたいせつです。長いものがたりですから、しんぼうよく読んでね。

(K・M)